

# 時枝誠記の古典教育論の考察

## A Study of Motoki Tokieda's Theory on Classic Education

中 嶋 真 弓

Mayumi NAKASHIMA

### 1. はじめに

時枝誠記は、戦後の古典教育について「国語教育に於ける古典教材の意義について」（1948）、「国語教育の意義」（1954）、「古典教育の意義とその問題点」（1956）、「国語教育における古典教育の意義」（1963）の4つの論文を発表している。その中で、「国語教育における古典教育の意義」は、「古典教育の意義とその問題点」と内容の多くが重複している。

本稿は、時枝誠記が古典教育について最初に論じた論文「国語教育に於ける古典教材の意義について」を中心に、①時枝誠記が何を問題にしているのか、②時枝誠記はどのような古典観をもっているのかを分析・考察することを目的とする。

時枝誠記は、戦後の国語教育に大きな影響を与えた一人である。それは、古典教育においても同様で、独自の古典教育論<sup>1</sup>を展開している。時枝誠記の古典教育に対する考えを分析・考察することは、時枝誠記の個体史研究の基盤および変容を見る上で重要であるとともに、今後の古典教育を史的に捉える上で意義あるものと考ええる。

なお、本文中の引用は、すべて新字体に換えたことを付記する。

### 2. 戦後初期の古典教育の位置付け

1947（S22）年、「教育基本法」の公布とともに、『学習指導要領（試案）』が発表された。そこには、古典について次のような文言が見られる。

#### 第一節 まえがき

中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない。また、特殊な趣味養成としての文学教育に終ってもいけない。つねにもっとも広い「ことばの生活」に着眼し、実際の社会生活に役だつ国語の力をつけることを目かげなければならない。

#### 第六節 文学

##### 二 文学の学習指導上注意すべき点

いままでは、文学の学習において、現代よりもとかく古典を主にし、ごくわずかの作品

をあまりに分析的にとり扱ったために、生徒の興味をそぎ、文学のめばえを局限するきらいがないでもなかった。次に、指導上注意しなければならないことを列挙する。

(一) 現代のものを主にし、ごくわずかの古典を加える。(下線は、筆者による。)

「中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない。」と、古典教育と決別する強い姿勢を見ることができる。しかし、その一方で、「現代のものを主にし、ごくわずかの古典を加える。」とも記している。「わずかであるが残しておく」というのである。決別しなくてはいけないが、しかし、きっぱりと断ち切ることができない、その苦しさを見て取ることができる。では、「古典の教育から解放されなければならない」とあるが、なぜそうしなくてはならないのか、そのように取り上げられている「古典の教育」とは一体何を意味しているのであろうか。

戦前、戦中の古典あるいは古典教育について、鈴木二千六は、次のように述べている。

皇国の民としての「国民精神の涵養」のための一素材および一手段としての意味づけである。国（為政者）によるこれら一連の政策的な教育への介入は、国語科教材および国語科教育の在り方を、一つの方向に向かわしめていくことにするわけである。その中でも、とりわけ「古典」は、国民思想や国民感情に深く入り易い立場にあり、その一律化に一役買う結果になったのである。ここでは、「古典」が本来的に有している文学的価値や教育的価値は全く鑑みられることはなく、学習ではなく教授の教材とされてしまったのである。<sup>2</sup>

そして、深川明子は、戦後の古典教育について次のように述べている。

日常生活における言語活動の重視の姿勢を基本的に踏襲する一方、古典教育からの開放に言及している。この古典教育からの解放は、戦前の古典偏重主義に対する反動として現われたものである（中略）戦後の中学校における新しい古典教育は、（中略）戦前の古典教育に具現化された国語教育観への批判をふくめて、古典教育からの解放と言う形で出発した。これは、古典教育そのものが持っている独自の目標や機能についての検討を全く抜きにして行なわれた古典教育の否定であった（後略）<sup>3</sup>

戦前、戦中、そして戦後初期において、古典は『『古典』が本来的に有している文学的価値や教育的価値は全く鑑みられることはなく、学習ではなく教授の教材』とされ、そして、「古典教育そのものが持っている独自の目標や機能についての検討を全く抜きにして行なわれた」と言える。このように見ていくと、古典教育はなされていたが、それは国語教育としてではなく時局が求める別のところに目標が置かれていたと言える。古典が背負わされた荷は重いものがあったと言えよう。

さらに、高森邦明は、当時の国語教育の在り方を捉えて、次のように述べている。

「ことばの生活」→「日常生活のことば」→「ことばの活動」→「ことばの効果的使用」というように、一連の展開にしてみると、これは、過去の中学校国語教育における古文、漢文、文語文法を重視した展開と完全に違った性格のものであることがわかる。(中略) 言語技能中心の国語教育でなくてはならないというのである。<sup>4</sup>

このように幕開けした古典教育において時枝誠記は、当時の教材について、次のように述べている。

古典教材を従来そのままに残して置くならば、必ずやそれは旧思想を温存するものとして手痛い非難を買ふことは明かである。さりとて旧教材に代る新古典教材を探し出すことは恐らく非常な困難に違ひない。むしろ古典に手を触れないのが賢明な策であつたかも知れないのである。<sup>5</sup>

戦前、戦中の古典教育は、古典そのものの価値を見極め、古典本来のもつよさについて学ぶ教育ではなく、国粹主義への気運を高めるための道具であり、日本国民として精神を高揚させるものであったのである。そして、敗戦とともに古典教育は戦争の一翼を担った、国粹主義の精神を高揚させた罪深い存在として、攻めを受けたのである。時局に翻弄させられる古典教育の姿がここにはある。そして次の文言から、時枝誠記の当時の古典教育に対する悲痛な思いや危惧が伝わってくる。

国文学は研究であつて、教育とは何のかかわりもないものであると一応は逃げて、国文学の目的は、古典を扱ふ技師を養成するのではなく、やはりそこには厳然たる人生的意義が裏付けされてゐるのは当然であるから、それをも否定しないかぎり、国文学研究の究極の目的は、広い意味に於ける古典教育に帰着するものと考へなくてはならないのである。今日、古典教育は無益であり、有害であるといふならば、国文学の研究を継続することも許されないであらうし、もしそれが許されるとすれば、それは古典教育とつながつて来ることは必然である。<sup>6</sup>

続いて、1951 (S26) に発表された『中学校・高等学校学習指導要領国語編 (試案) 改訂版』には、古典について、次のような文言が見られる。

・ (二 国語科はどんな方向に進んでいるか)

〔国語の教育課程は、だんだんと、広い社会の必要に応じるものになろうとしている。〕

これまでの国語教育、ことに中等学校以上の国語教育は、教室の中で古典を読んだり、名文を読んだりすることをおもな仕事としていた。そうした言語文化の習得をとおして、言語生活を向上させようとねらっていた。これに対して、新しい教育課程の考え方

では、われわれはどんな言語生活を営むかを考え、その生活の向上に必要な能力をつけようとする。(中略) また、古典よりも現代文学のほうが生徒にとって興味もあるし、能力にも合っているから、国語の教育課程の中では、後者のほうがもっと重要な地位を占めようとしている。けれども古典の学習指導を捨ててはならない。多くのりっぱな、価値ある作品が過去において書かれてきており、それを読解する力がつけば、その読書は楽しいものであるばかりでなく、われわれの祖先の生活や精神が理解される。古典の学習が不要なのではなくて、国語教育を古典に限ることが狭いというのである。(下線は、筆者による。)

上記の『学習指導要領(試案)改訂版』では、「古典の学習指導を捨ててはならない。多くのりっぱな、価値ある作品が過去において書かれてきており、それを読解する力がつけば、その読書は楽しいものであるばかりでなく、われわれの祖先の生活や精神が理解される。」とある。古典には、「価値ある作品」があり、それを読むことによって「祖先の生活や精神が理解される」というのである。ここに、当時の古典の位置付け、あるべき姿を見ることができるが、新しい国語教育の目標並びに現代文学との関わりの中で、古典あるいは古典教材は肩身の狭い存在であることは、古典教材の採録数の減少からも明らかである。

しかし一方で、両『学習指導要領(試案)』は、一見古典教育を否定しているようにも思われるが、見方を変えれば、古典教育が生き残るためにどうあるべきかを模索しているかのようにも受け取ることができる。鈴木二千六はこの点について「過去の国語科の歴史を振り返った時、古典教育は否定的に評価されなければならないとしても、古典を学習する真の価値については否定できないという、時代の苦悩を見ることができる。」<sup>7)</sup>と述べている。

このように、戦後古典教育は、戦前、戦中とは位置付けにおいて大きな方向転換を強いられながらも存続したのである。そしてこのような中で、古典教育について自己の考えを世に問うたのが時枝誠記である。では、時枝誠記が何を問題とし、どのような古典観をもっていたのかを分析・考察していくこととする。

### 3. 「国語教育に於ける古典教材の意義について」に見られる時枝誠記の古典観

時枝誠記は、1948(S23)に「国語教育に於ける古典教材の意義について」で初めて戦後の古典教育について述べている。論文は、「はしがき・一最初に結論を・二一の歴史観・三『惚れさせない』国語教育・四外国の古典と自国の古典・五失われた世界としての古典」の構成で論じられている。時枝誠記は、冒頭「はしがき」で次のように記している。<sup>8)</sup>

(敗戦後・・・筆者補) あれほどやかましかつた日本精神、日本的なものの唱道が、殆どその声を断つたところから考へて、祖国の歴史を顧みることそのことが、多くの人々には、時代錯誤であり、反動的であるといふ風に思はれたのであらう。そこまで論理的に考へない人々にも、日本精神について語り、日本の古典について云々することは遠慮すべきことであり、

気がひけることであると考へられてゐるに違ひない。(中略) このやうな思想的動向を捉へて私の小論の一の手がかりとしようとしたのである。<sup>9</sup>

時枝誠記は、敗戦後の古典に関わる思潮を上記のように捉えた上で、次のような疑問を投げ掛けている。

(戦争のたけなわの頃、時枝誠記がある会合で質問した内容に触れたもの・・・筆者補) 国文学者は何故に古事記とか、日本書紀とか、万葉集とか、神皇正統記とかばかりを取上げることが日本精神の闡明になると考へてゐるのであるか。そしてそれが何故に国文学の時局への寄与と考へられるのであるか(後略)<sup>10</sup>

(敗戦後教科書に古典教材が殆ど姿を消していること並びに上記の注5の文言に続いて、以下のように述べている・・・筆者補) これほどまでに古典を無視し、疎略にしてよいものであらうか。それは反動的立場や、懐古趣味の立場からばかりからさう感ぜられるのではなくして、もつと冷静な国語教育的立場からも当然問題にされることであらう。<sup>11</sup>

時枝誠記は、時代の思想的動向を捉えた上で、敗戦後、国文学が平和文学の探求・自我の覚醒の文学の追究等に進むのを見て、同論文において「古典を探究することが如何に馬鹿げているか」「古典文学は時局に対する一種の幫間に過ぎない」と強く批判している。古典教材についての観点から論じているように見えるが、「国語教育的立場」からも分かるように、「国語教育における古典の在り方」「古典教育の本来の意義」について問う姿勢が見られる。古典あるいは古典教育の本来のあるべき姿を無視して、時代の都合のよいように翻弄される古典教育を見て、国文学者として避けて通ることができなかつたと考えられる。鈴木二千六は、ここでの時枝誠記の姿勢や思いについて『『古典』の扱い方を初めとする『古典教育』に対する姿勢の問題を問おうとしているのである。(中略) 戦前、戦中国語教育における『古典』教材が、その時々の中、国民精神の涵養の材料として利用されてきたという、『古典』の扱われ方に対する、国文学の研究の在り方についての意思表示である。』<sup>12</sup>と記している。古典教材がその時々によって採録される数が変わる、あるいは、時代によって古典教材が本来の意味ではないところで固定化される。時枝誠記はそこに疑問をもち、古典教育が時局に関係なくどうあるべきかを論じることによって、戦後の古典教育の在り方を真正面から捉えようとしたと考えられる。

以上のように冒頭で時局の思想的動向に対する問題点を提起した上で、「一最初に結論を」で、次のように述べている。

「古典を読むといふことは、故人の言葉に耳を傾けることである。同時に、古典は過去の長い年月に亘つて多くの人々に尊重され、愛好されたものであるから、古典を読むといふことは、それら古典を受け継いだ人々の心をも読むことを意味する。

人は他人の伝記を読むことによって、人生の指針を与へられることが多いが、同時に、又

それ以上に自己の生活の回顧や反省によつて己の行くべき道を知ることが多い。自国の古典を読むといふことは、それと同じ意味で、自己を正しく知り、現在の自己を拡充する大切なよすがである。古典は、鏡に映された民族の自らの姿である。己の姿を見るのに、これに自惚れさせたり、これに卑屈であつたり、又これを歪めることがあつてはならない。」右の結論には、一に古典の意味、二に古典を読むことの効果、三に古典を読む態度が述べられている。<sup>13</sup>

時枝誠記は、古典を「過去の長い年月に亘つて多くの人々に尊重され、愛好されたもの」「鏡に映された民族の自らの姿」と捉え、その古典を読むことによって「自己を正しく知り、現在の自己を拡充する」よさがあるとしている。そして、古典を読むには「故人の言葉に耳を傾ける」「古典を受け継いだ人々の心をも読む」態度が大切であり、惚れたり、卑屈になったり、歪めたりしてはいけなさと説くのである。ここに、時枝誠記の古典観あるいは古典教育観を見て取ることができる。

世羅博昭は、ここに時枝誠記の独自性があるとして、次のように述べている。

一般的には、古典を読むということは「故人の言葉に耳を傾けること」であるととらえるだけであるが、時枝誠記は、さらに、「古典を受け継いだ人々の心をも読むこと」を挙げている。〈創作者の心を読む〉読みと、その古典を読んだ〈読者の心を読む〉読みという、二層性を持ったものとして、古典の読みをとらえているのである。〈読者の心を読む〉読み、すなわち、〈読み手を読む〉という視点からの古典の読みを提起したところに、時枝誠記の独自性を認めることが出来る。<sup>14</sup>

「はしがき」で、時局に翻弄される古典教材の在り方に疑問を提示し、「一最初に結論を」の中で、それを読む者の姿勢を問うている。古典教材においてはそこには時代との関わりがあり、古典を読むところには、人が存在する。そして、時代との関わりや人との関わりにおいて、そこには、「現在」を中心としてどうなのかという思想が流れる。「時局が〇〇だから、古典教育を活用する。」「時局が〇〇だから、古典教材を読ませる。」というように、「現在・今そして時局」から見た視点で、古典教育や古典教材がどうあるべきかが考えられているのである。繰り返すが、中心は「現在・今生きている人間・現在の社会情勢」なのである。そして、時枝誠記は、そこにも疑問をもちそのような在り方を批判しているのである。

時枝誠記は、「二一の歴史観」の中で、自己の歴史観を明確にしている。

古典に対する私の見解には、一の常識的な歴史観が根底に横つてゐる。それは、現代は過去の集積の頂点ではないといふ考方である。(中略)過去の何れかの時代に於いて古典たることを保障されたものは、現代的評価の如何に関せずこれを古典といふべきであると考へるのである。(下線は、筆者による。)<sup>15</sup>

前述した、「現在・今・社会情勢」を中心として古典を考えることの批判の根底には、時枝誠記の先に記した歴史観があつてのことである。不易流行の流行部分が先行している戦後の古典教育においては、現在からの価値判断によってその評価がなされる、つまり、「現代的評価」<sup>16</sup>がなされるのであるが、古典、古典教育がそのようであってはならないという確たる考えや態度を見ることができるのである。このように考えてくると、「三『惚れさせない』国語教育<sup>17</sup>」の考えが打ち出されたのも理解ができる。時枝誠記は、「三『惚れさせない』国語教育<sup>18</sup>」の中で、次のように記している。

国語教育の主眼とするところは、相手の思想の如何に関せず、己を空しくして、これを正確に忠実に理解する能力と、このやうな寛大な、又冷静な、そして己の好尚に媚びない峻厳な態度を養成し訓練するところにあると云はなければならない。一言にして云へば、相手を理解はするが、かりそめにも惚れない国語教育でなければならないのである。(中略) このやうな国語教育の原則に立つた古典教育に於いては、その教材の思想内容が、如何なるものであるかを案ずる必要はない。時には悪徳を奨励するようなものであつても、現代と相背反するやうなものであつても何等懸念すべきことではないのである。むしろあらゆる思想に接してこれを理解する力を涵養することこそ望ましいことであると云ふべきである。<sup>19</sup>

あらゆる古典教材に接した時も、正確に忠実に理解し、寛大かつ冷静な峻厳な態度で向かうことが大切だというのである。そこには、現代的評価あるいは時局に関わることもない。これは当時の感化主義への批判と言える。時枝誠記は、さらに1943 (S18) 年の「国民科教授要旨」を挙げて、「『国民精神を涵養し』といふべきところを、『民主主義精神を涵養し』と置き換へるならば、恐らく新時代の教授要目が出来上がるのである。しかしそれはただそれだけのことであつて、惚れさせる国語教育である点に於いて少しも変わらないのである。」(P16) としている。つまり、新時代と言えども、「古典の扱われ方」に何等かわることがないことへの批判なのである。そして、「はしがき」の「日本書紀とか、万葉集とか、神皇正統記とかばかりを取上げる」ことへの批判は、上記のような古典教材に対する考えからくるものでもあった。

「四外国の古典と自国の古典」では、時枝誠記は、「古典蔑視或は古典抹殺の態度」があらわれる理由として「古典を常に功利的見地に於いて考へるところから来ることであり、現代の評価によつてのみ古典を決するといふ考方に基く」(P18) ことを挙げている。古典教育を歪める要因として「現代的評価・惚れさせる教育」がなされていることがあり、これによって「古典蔑視・古典抹殺論」が出てくるというのである。そして、そうならないためには、「正確に忠実に理解する能力の育成、寛大で冷静、己の好尚に媚びない峻厳な態度の養成・惚れさせない国語教育」をする必要があるというのである。

「五失われた世界としての古典」では、次のように記している。



古典を読むことは、失われた世界を取り戻すことに外ならない。(中略) 現代人と失はれた古典の世界とを媒介するところに古典教育の使命が存在する(中略) 古典は、現代と異なつた歴史的社会的条件の下に制作されたものであるから、そこに現代的意義を求めることは、厳密な意味に於いて不可能なことである。(中略) 異質的な古典に触れて存分に滋養を吸収することが出来るやうな寛大な包容力を持った魂を養つて行くこと<sup>20</sup>

これこそが、古典学習において重要だと言うのである。

「五失われた世界としての古典」は、今までの論を再度確認するような内容が記されている。「失われた世界を取り戻す」「古典の使命」では、前述の「古典は、鏡に映された民族の自らの姿」であるから、古典を通して、自己を正しく知り、現在の自己を拡充する。そのためには、繰り返すが「正確に忠実に理解する能力の育成、寛大で冷静、己の好尚に媚びない峻厳な態度の養成・惚れさせない国語教育」をする必要があるのである。世羅博昭は、時枝誠記が「現代人の成心を捨てて、虚心な態度で、『現代に無いものを求める』ことの大切さを強調している。この『現代に無いものを求める』ところに、古典教育の意義を認める点が、時枝古典教育論の特徴である。」<sup>21</sup>と述べている。

以上、時枝誠記の古典に対する考えを考察したのであるが、重複する箇所も多々あるが、以下のように整理してみた。

#### ◇思潮に対しての疑問

- ・国文学は時局に対する一種の幫間に過ぎない(中略) 国語教育の立場として、これほどまでに古典を無視し、疎略にしてよいものであろうか。
- ・現代的評価の過信への批判
- ・「惚れさせる国語教育」への批判

#### ◇歴史観

- ・現代は過去の集積の頂点ではない

#### ◇古典観<sup>22</sup>

- ・古典は過去の長い年月に亘つて多くの人々に尊重され、愛好されたもの
- ・古典は、鏡に映された民族の自らの姿

#### ◇古典教育の意義

- ・現代人と失はれた古典の世界とを媒介するところに古典教育の使命が存在する

#### ◇古典を読むということ(態度)

- ・故人の言葉に耳を傾けること
- ・古典を受け継いだ人々の心をも読むこと
- ・失はれた世界を取り戻すこと

#### ◇古典教育の目標

- ・(国語教育の主眼とするところは)相手の思想の如何に関せず、己を虚しくして、これを正確に忠実に理解する能力と、このやうな寛大な、又冷静な、そして、己の好尚に媚びない峻



厳な態度を養成し訓練するところにある

- ・「惚れさせない」国語教育

#### ◇古典教材として取り上げるもの

- ・教材の思想内容が、如何なるものであるかを案ずる必要はない。時には悪徳を奨励するようなものであつても、現代と相背反するやうなものであつても何等懸念すべきことではない

## 4. おわりに

時枝誠記は、「国語教育に於ける古典教材の意義について」の中で、「現代は過去の集積の頂点ではない」という確たる歴史観のもとで、古典教育について論を展開している。そして、その中で、「現代的評価」「現代的意義」「感化主義」に対して強く批判している。また、古典教育を学ぶ上での古典教材にも言及し、その在り方、それ以前の採録の在り方にも着目し、時局によって本来になうべき姿を失ってしまっている、翻弄する古典教材がどうあるべきかを論じている。時枝誠記は、独自の論を展開しているとよく言われるが、文言一つ一つに時枝誠記の古典に対する思いを感じることができる。国文学者として国語教育そして古典教育がどうあるべきか「普遍的な古典教育の在り方」を真摯に求めているようにも感じられる。

今後、古典教育を論じた他の三つの論考においても分析・考察をし、時枝誠記の古典教育理論を整理したいと考えている。<sup>23</sup>

---

1：世羅博昭「時枝誠記の古典教育論の考察」（『鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）第8巻』1993）

世羅博昭は、時枝誠記の論に対して「時流に流されない、普遍的な古典教育のあり方を求めて」と記している。（P37）

2：鈴木二千六「中学校『古典教育』の展開—中学校戦後『古典教育』の出発—」（『東京学芸大学紀要 2 部門42』1991）p315

3：深川明子「中学校における戦後の古典教育」（『教科教育研究 7』金沢大学1974）p37

4：高森邦明『近代国語教育史』文化書房博文社1982 p344

5：時枝誠記「国語教育に於ける古典教材の意義について」（『国語と国文学』至文堂1948）p14

6：注5に同じp14

7：鈴木二千六「古典教育の過去と未来」（『月刊国語教育』東京法令出版1995）p33

8：阿部真人「古典教育論研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝実三氏の所論を中心として—」（『広島大学教育学部紀要 第二部』1974）p129

阿部真人は、「はしがき」で、時枝誠記が、問題意識を3点にまとめているとしている。

第1：日本古典を戦争犯罪者と同一視し、古典的精神との断絶によってのみ、日本が民主的国家として再生することが可能だとする終戦後の思想的動向への疑問

第2：戦時中は古事記とかばかり取り上げ、戦後は平和文学の探求等に開拓の歩を進めようとしている傾向に対する批判

第3：教科書の古典教材の激減ぶりに対する危惧の念で、これほどまでに古典を無視し、疎略してよいか。もっと冷静な古典教育的立場からも当然問題にされることであろう。

(上記は、筆者がまとめたもの。)

9：注5に同じp13

10：注5に同じp13

11：注5に同じp14

12：注2に同じp319

鈴木二千六は注7においても、古典教材の在り方に疑問をもっている時枝誠記について、次のように述べている。

古典の作品が、戦争遂行の時代にあってはそれに都合のよいように扱われ、戦争が終われば、戦争遂行の精神の追放ということで、古典の教材をも否定するという扱い方に対する問題の追及である。

13：注5に同じpp14-15

14：注1に同じp40

15：注5に同じp15

16：時枝誠記「古典教育の意義」(時枝誠記『時枝誠記国語教育論集』明治図書1976)pp92-93

「古典教育の意義」の中でもこの点に触れており、「現代的評価に値するものが古典」であるとする考え方や「現代的意義を求める」古典教育に対して批判している。

17：注16に同じ

時枝誠記は、「古典教育の意義」の中で、「感化教育＝惚れさせる教育」として論じている。

18：田近洵一『戦後国語教育問題史』大修館書店1991 p36

田近洵一は、「惚れさせない」国語教育について、次のように述べている。

「惚れさせない」というのは、一言で言うなら感化主義への拒否である。国民学校における「言うところの『文学的表現』の中で、見事に、皇国観念がつくり出した一つの虚像に同化し、冷静な思考を停止させて、精神を昂揚させる」ような国語教育の否定である。そしてそれは、今日における、いわゆる文学を教化の具として、何かの「ために」文学教育への否定に通じるものであった。この時枝の「惚れさせない」という提言を、文学の読みにおける感動体験の否定と受け取ることは誤りであろう。(中略) 異質なものを理解する力があって、初めて、すぐれた思想に感動し、そして、誤れるものを批判的にとらえることができるのである。

19：注5に同じp17

20：注5に同じpp18-19

21：注1に同じp42

22：時枝誠記の古典観について阿部真人と渡辺春美は次のように述べている。

・阿部真人

時枝氏の古典観ならびに古典教育観は、一言にして言えば、わが国の伝統的な考え方「感化主義」の否定の上に構築されているということができよう。そこでは、古典は読み手の主観にかかわりなく、客観的な存在として認識され、恣意的な読みが戒められる。  
(注 8 に同じ p131)

・渡辺春美

時枝誠記氏の古典観は、次の点に特色があるととらえられる。

- ①古典を「過去の長い年月に亘って、多くの人に尊重され、愛好されて来た文献」とし、読者の支持を古典である条件とした点。
- ②古典を民族の榮譽とともに民族の懺悔を物語るものとしてとらえている点。
- ③①②によって、古典を規範と考える古典観、古典に普遍性を求める古典観、古典に現代的意義を求める古典観とは異なる独自の古典観となっている点。
- ④古典観には、時枝誠記氏の言語過程説と歴史観とが反映している点。

(渡辺春美『戦後古典教育論の研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝実三氏を中心に—』  
溪水社2004 p330)

23：渡辺春美は、『戦後古典教育論の研究—時枝誠記・荒木繁・益田勝実三氏を中心に—』溪水社2004の中で、時枝誠記の古典に関する四つの論考を前期・後期として分類している。「国語教育に於ける古典教材の意義について」を前期とし、あとの三つの論考を後期としている。そして、このように記している。

四つの論考は、先行研究において、一連のものとして扱われてきた。確かに、古典を読むことの一般的な意義についての所論は、一貫しており、変化が見られない。しかし、(中略)論考①(「国語教育に於ける古典教材の意義について」を指す・・・筆者補)と論考②③④(あとの三つの論考を指す・・・筆者補)との間には、「一般国語教育の原理」に基づく古典教育論からの独自の古典教育論の追究へと、古典教育論の内容に変化が見られ、一連のものとして扱うことはできない。(p14)